

並

西海道
附 琉球島

八

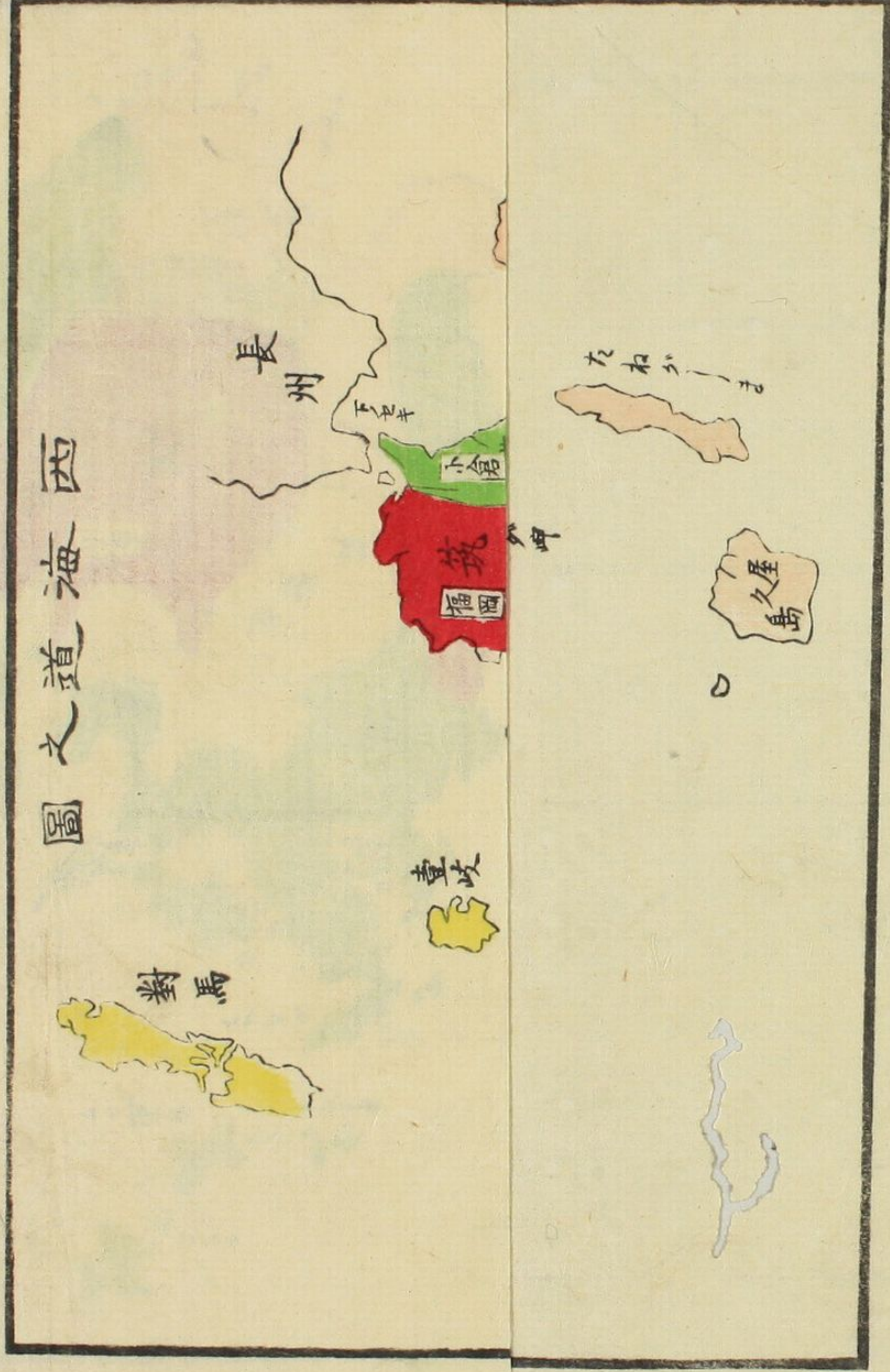
止







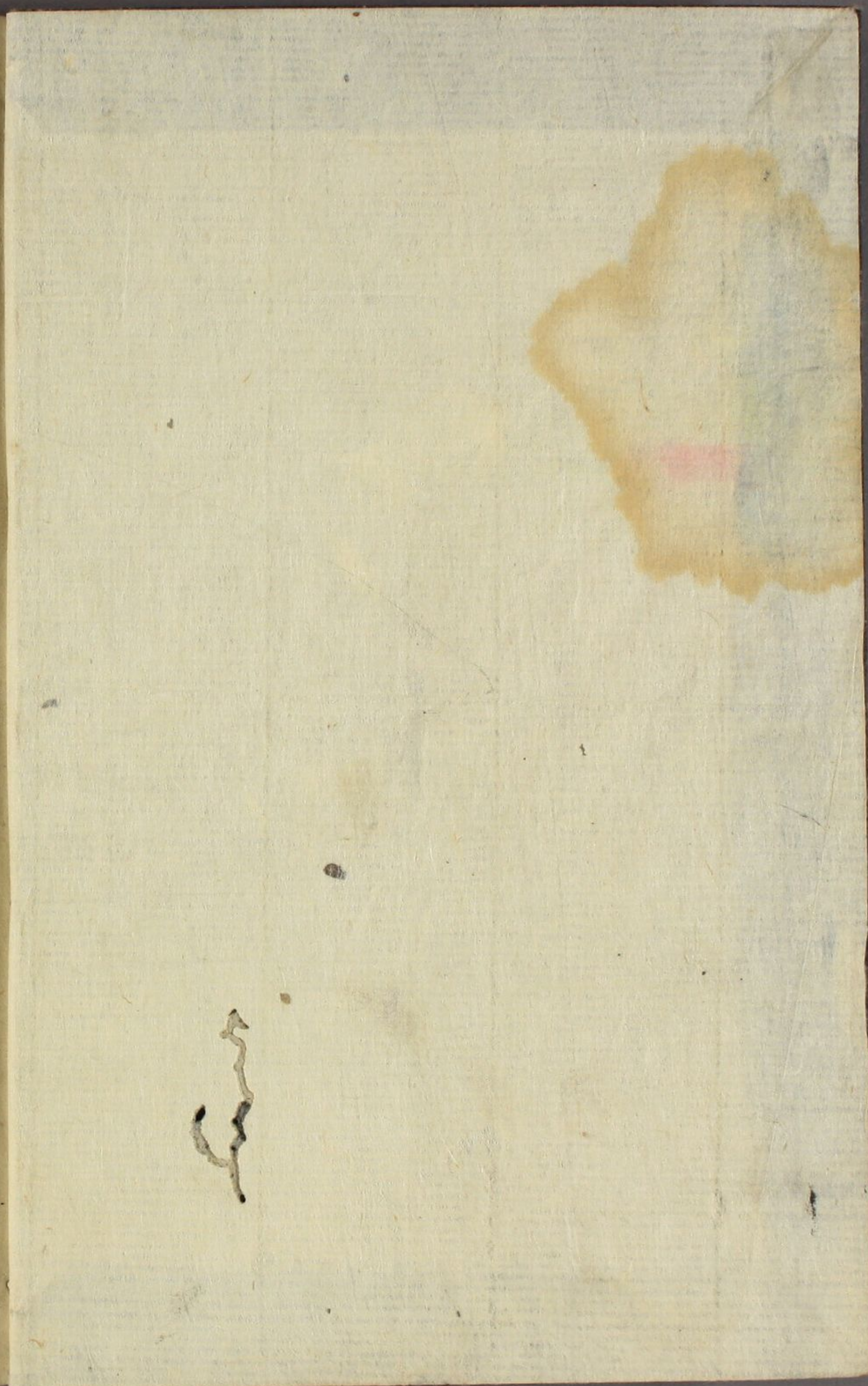
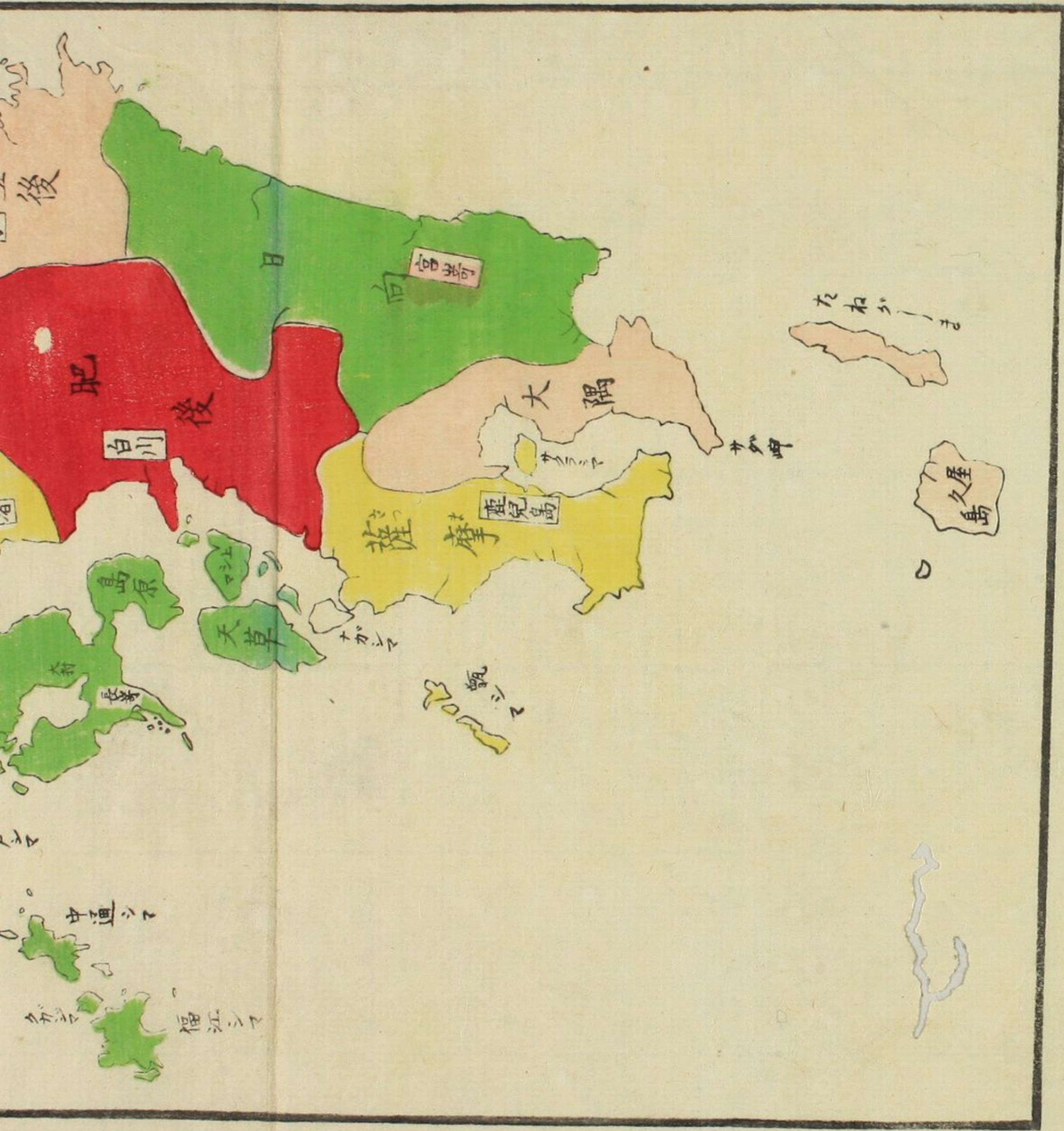
西海道之圖



~~~~~

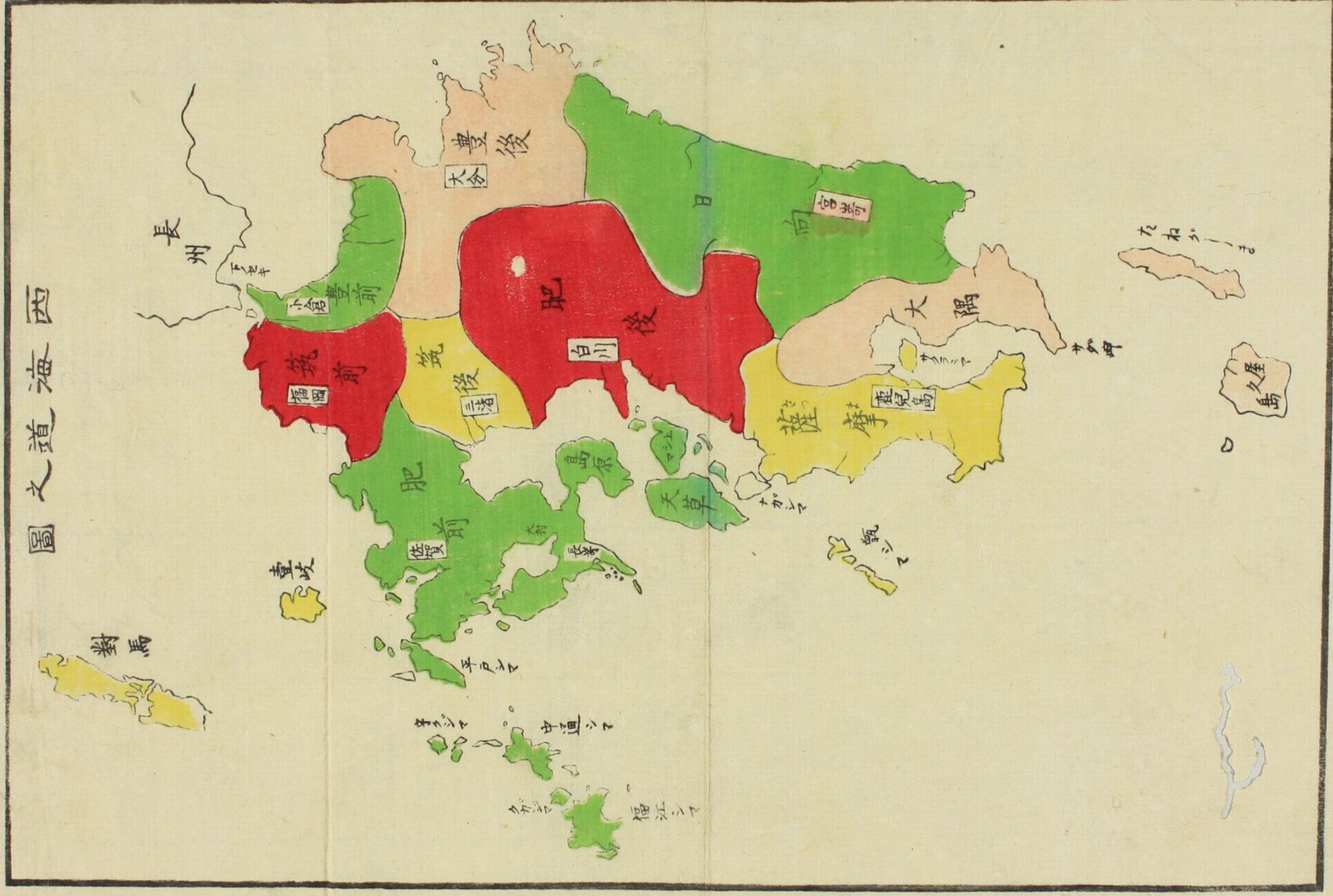








西海道之圖



Handwritten signature or mark in the bottom right corner.



瓜生氏日本國畫巻八  
 西海道の九ヶ國  
 其の昔より古くして築紫といひ  
 又鎮西といふ稱へり。古くは  
 日本おほんの西方さいほうを東ひがしの  
 四國しこくと中國ちゆうごくを隔へる





日本國志卷之八  
相々々々南の方の太平洋  
西と北とい日本海南南小向  
つて九ヶ國を綴り合せし  
島の必週廻八百六十里其  
の勢一を  
筑前より地形を驢馬の

首のくくく耳より西  
南紀前筑後小界して口  
頭豊後小稍連り東を  
豊前和能形小八廻み頤喉と  
ありと北を岬を差出  
鬚前頭を明ありと國中まで



山多く眼鼻の間は秋月城  
口より下ふまゝ白木山淺茅川  
を此處をよつと北ふ流きしめ  
支を分け郷音洋小沼きハ  
北に向きハ長門の國北を  
岬の鐘が嶮頭鬘籠の歌也

とこ是より地方西小向き  
諸見川をお越て鶴崎の西  
海濱の港を香推仲哀乃  
崩玉ア古流も眺むる  
海を松浦瀉西南岸を海  
中(釣)とむる志賀岬

山多

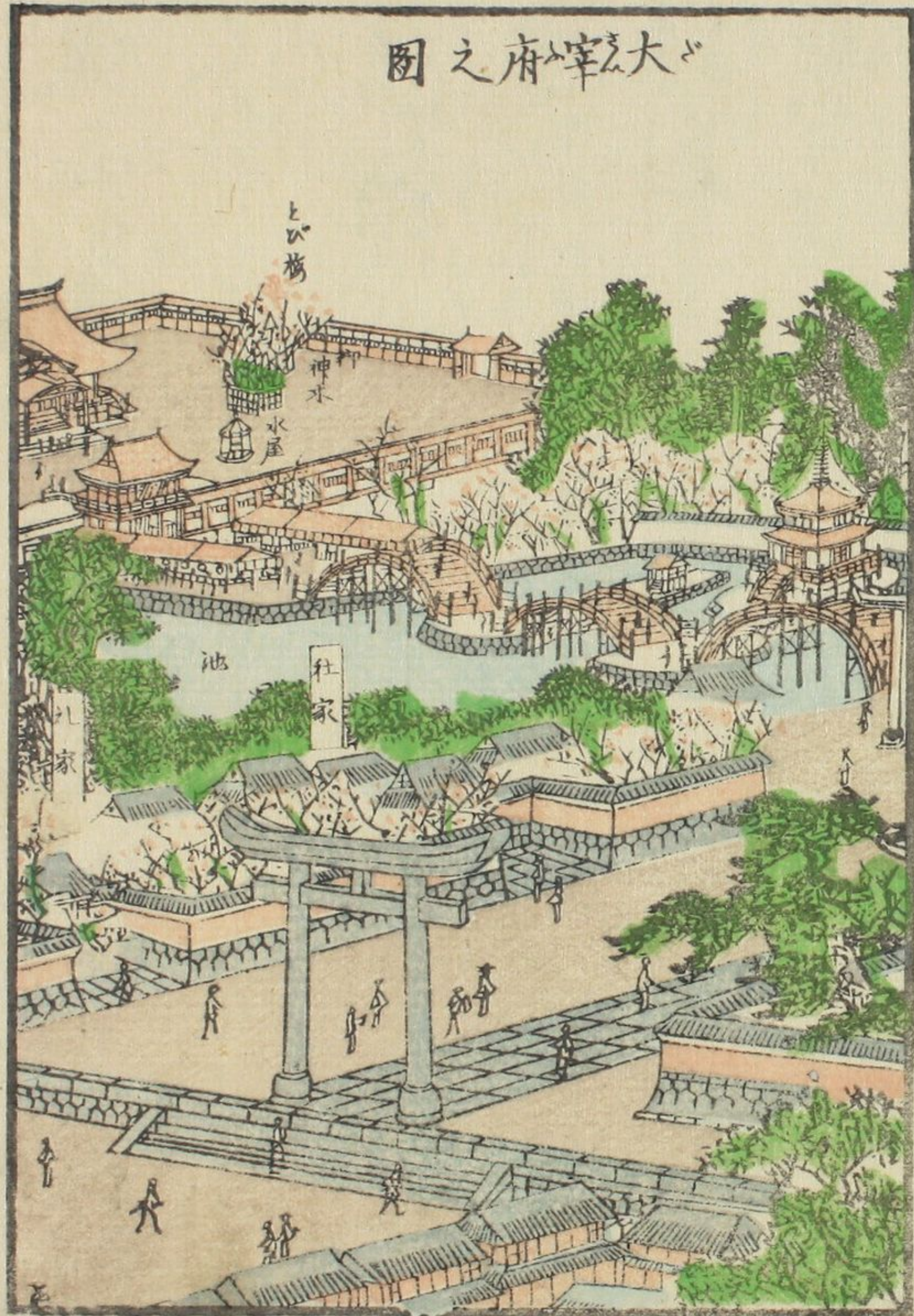


海の中道是を以て岬乃  
南海水乃四角小喰込北  
隅を神威を以て箱崎也  
千代の松原神さびし風  
系こころふ無双なり南  
角の福を以て全國一國

十五郡。管轄を以て福を  
乃。縣廳の所なる所の中  
博多の所はきこし  
右宰此帥を以て九州二  
島を鎮守して萬々矣賊  
を防ぎたる。太宰府一都



大宰府之圖



大左大臣時平朝臣以饒小。のり  
 東延喜の昔。左大  
 遷。さき玉へ。菅原乃道  
 真公の旧跡。今。藩白  
 魏。総。宰府の北。米  
 山。阿。南。小。芦。城。之。笠。山。



寒水峠天拜山筑波境ふ  
 程近し。福岡とてんそ西の方。  
 生れ松系能古の浦。西の半  
 島韓泊沖を島とたち并  
 ぶ。中ノ姫島と玄界り多め。海を  
 名不員ふと玄界洋日本海

大宰府の園





乃内ぞう。人口三千一。あ飯。  
風ぞと温和風何え生得き  
やう如人扱は。さうて産物  
を塩と燻博多。後染と博  
多織。  
東二筑後と北の方斜り

筑前と地を接し。地於三  
稜形。一。尖。一。頭。一。東。乃  
方。豊。後。不。連。と。南。を。と。る。  
肥。後。弓。形。不。の。の。と。と。西。の。北  
手の半分を肥前と接し  
南手は半の肥前と海を



抱く。其れ瀧底小柳川河  
里。矢部川東より来り。三つ小  
分。是を柳川乃。前後より海小  
入る。筑波川を九州の第一  
番。其大河より豊後小豊  
里筑前乃界より八里紀

前との境を繞り海なる。  
其れ上流小久留米河より。  
柳川市街乃正北より。全  
十郡管轄乃。之瀨縣原の  
所。在る。其れ良山と武  
内宿務を祠る。其れ



久留米の東二里あり。阿蘇  
 東南隅ふ文字山あり。豊  
 後界ふ熊山也。之井岳ふ  
 於此外の少山の數も如月  
 しく於風出温暖人曰ま  
 二十七の七子館を風候も實候

あり。國を産物ふ茶地所  
 西海道の東に於。豊前を  
 西に筑前ふ。鈍角をなす  
 地を接し。南東を弓形ふ  
 張出り豊後ふ界せり。東  
 北一帶濱続き。北の端を



東北へ向て岬を突出せし岬  
の尖も門司の関是も九あり  
乃ハ口より中國長門にお對  
し中ハ南北兩海の潮の通  
ふ狭き迫門下の関より一  
やぶるも海より一ふ一里を

門司の後に内裏あり  
又此れ後小倉あり金  
生板櫃あり河津左右を通  
り海小倉より小倉を全國ハ  
郡を支配の縣廳あり地  
より小倉縣と中よりなる



八丁峠より北の西南筑前  
 國との國界岬の本小東へ  
 向き延て出する小岬の今  
 津は南を一海灣を北岸  
 を安藝港傍小落ちの  
 一水乃其水源も西南乃

筑前豊後を國乃境より  
 崎の彦山を港の南小を瀬  
 川北の水源を彦山を東  
 南親山大嶽の山々の水落  
 つるなると北は河口中津  
 まで中津の市街より南小



天山てんざん 鹿山かざん 諸山しよざん あり。さき  
東あづま あり。河がは あり。河がは を渡わた  
まを宇佐うさ の宮みや。まをたふし  
豊ぶん 後ご 乃すなはち 界かゝり あり。土とち 地ち 温あたたか  
小人こじん 曰いわく 二十にじゅう 三さん 萬まん 五ご 千せん 餘あまり。  
國くに 産うみ 硃しゆ 水すい 日にち 咽おと 小こ 硫りゅう 黃わう 小こ 倉くら

乃すなはち 木き 綿めん 織おひ。  
第だい 四し 豊ぶん 後ご の北きた 乃すなはち 方かた 豊ぶん 前ぜん  
の弓ゆみ 北きた 乃すなはち 受うけ 西さい 一いち 帯たい  
北きた 半はん の角つの 絨じゆう 張ちやう 出だ 筑ちく  
前ぜん と筑ちく 後ご を衝つ て南みなみ 半はん の  
半はん 乃すなはち 肥ひ 後ご の一隅ひとしほ を受う け

日本書紀

土



南を日向地、小斜、小界を  
接し、たゞ東をまきつて海  
濱より水陸出入るを、  
地形一併西縮し、東を  
開き、其所猫の物を捉る  
ごとく、西北首より西南を

之を猫の脊中とて、東の  
海を数々岬、足なり、又  
物なり、北方、曲豊前の境、  
東へ向ひ、圓形の、  
地方より出て、北は南、  
乃海灣の北は、岸を

日本國書卷八



杵筑城西岸日出と府内  
あり。府内の全八郡を支  
配し。その大方の縣廳を置  
く所を。こゝより。近々別  
府あり。赤く温泉の湯舟あり  
日出と杵筑の間あり。おき半

島実出と府内の西小四極  
山。又北に西小烟燭をたふ  
吐出と鶴見山嶽をたふ。も  
小月さゆ。由布嶽錦峠  
あり。こゝに際より。由布川の  
つ水起ると東の方府内の



南みなみ小流おがをまへつるふ西にし遠とほく  
湯ゆ山やまをこ猫ねこのほ頬ほ乃なり地ち乃なり南みなみに  
此このをへんのみ水みづ集あつりて筑ちくのり前ぜん  
後ご乃なり際さい乃なり入いるまをあらうらう  
筑ちく後ごのた大だい河かをあらうる筑後ご乃なり川かわの  
水みづ源げんをうらうりし山やまはあらうるあらうる

魚う衣えとお松まつ本もとのし流ながれを控か  
さらに海灣わん乃なり南みなみ岸がし乃なり東とう北ほく向む  
ひまをひ抽ひきだする嶮さ峨がの関乃  
岬さか乃なり伴ばん豫よの岬乃なりおお對たい  
海う乃なり佐さの七里り乃なり岬さか乃  
腰こしの両側がわへをままりて出いづる三



又の川より舟岡川より肥後  
界より里波源より南の端より  
岩戸川流を合ふと一つと  
なる。岬の南を臼杵と又  
北は南を佐伯とまたこれ  
二市郷の間より小き岬の

数二つ。北をより日向の界  
まで。よきと二と此岬あり。  
又姫ヶ山嶺よりふ山日向と  
肥後と高嶺の界より南へ  
長年えらるる一國人白の大概  
を。四十よりあり六千人。風を



暖氣のまなきごと日向  
 比をまなきを積まき。産物  
 水晶錫鉛絞糸綿う梅  
 海羅。  
 才五肥前と東の方筑後  
 川を界と。筑後小橋

東北を筑前のまき小界  
 て。その他西南岬あり半島  
 えありと嶋あり千態あり  
 状奇と怪とささきと金取を  
 辟言ふまきと孔雀の歩むの  
 うくくくと頭と東屋と南



趾あしいまふもつ西しを履ふ心  
頭あたまの海うみふ近ちかき地ちを當あたる十  
一郡ひとしほの内うち東北とうほく八郡はつしほ控かむらふ  
又また相あ浦うらの内うちを支配しはいする。佐  
賀さか縣けん廳ちやうの所しよを立たてり。本ほん庄しやう  
川かへ牛うし津つ川が。又また流なが川が佐さ賀か

乃すなはち西しふあり。是こゝより東南とうなん  
鳥とりの脊せ有り。當あたるもや又また有り。乃すなはち  
沖おほと名なを著あて筑つく後ご地ちが  
肥ひ後ご地ちふ向むかへ海うみを抱たく。佐  
賀さかの西しふ鬚ひげ氣き振ふる山やま。山やまの西しふ  
相あ原はら川が。北きたへ西し岸がしの唐から津つ



方より西北海小臨む地は數  
の小岬分ち出でて孔雀の山  
よく似るも北乃二本のその  
間ち秀吉朝解征伐の時  
如陣營名古屋なるも玉崎  
川を唐津より南小ありて

西小流の川の南ち併りあり  
月て前小湾あり後へ小を  
後蘇鹿城の二山あり西小  
島より最大能半島西小  
小伸出て小岬左右小乳出  
し島の足をも象とる後



距の交い相浦より西へ四里  
 を平戸嶋間を狭き瀬戸  
 へ南へ南へ九十九島何年子  
 其西南より島五つ順に並び  
 て其如端のつを福江と名  
 を稱し五つ併せて五嶋と名

以て之を乃足は河と名  
 其より伊萬里の灣と  
 名を孔雀の身少を姥堂  
 と名け此所より温泉湧  
 き入湯の如日ふおほし  
 蟹の端より大村の市



街に西をさす。一大湾中  
り島あり。鯨の浦。大村  
りひびく。疎阜。まじり  
内海の一小湾。高湾。り  
のみ。土地狭し。是より。孝  
島の尾。やな。り。尾

先開き。り。三つとあり。下  
あり。者。り。丁字形。地。り。一  
り。中の尾。を。指して。一頭  
是。不向く。是。り。一頭。の。間  
り。り。即ち。大村。の。大湾。を  
下尾。と。中尾。の。地。り。際。を。



長く八つむすの浦浦輪の  
 底に長崎乃港を中尾  
 乃本より昔慶長年中  
 今も後あり互市場  
 朝奈々ふる矢も船  
 出八の敷敷く町も

圖々山芭





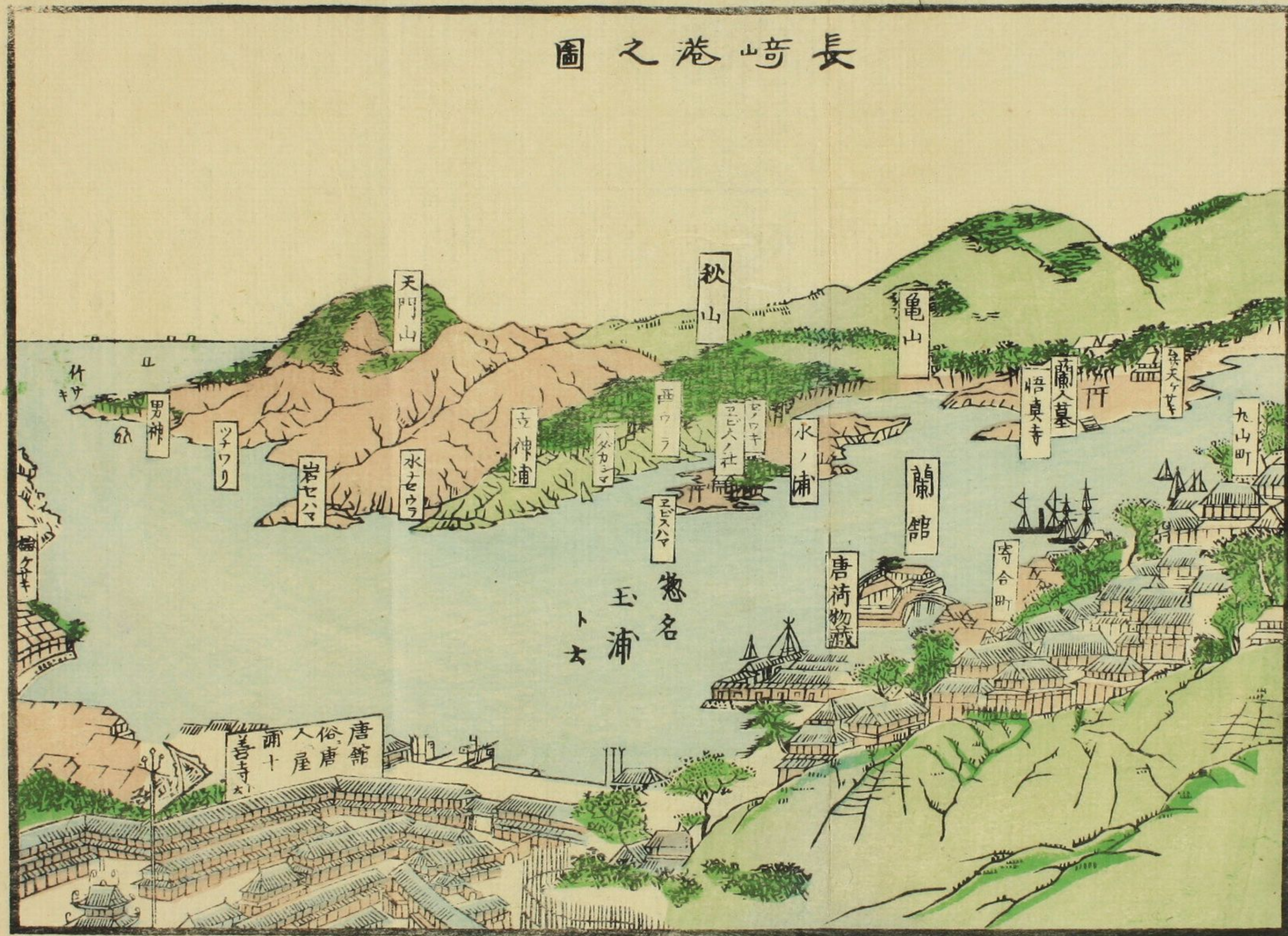
長く八の浦玉の浦浦の  
 唐如長崎乃港を中尾  
 乃本より昔慶長年中  
 今も後多る互市場  
 朝を夕あふ天に船  
 出八の敷好く町を

長崎港之





長崎港之圖



東...  
出八の敷敷く町...  
...



繁昌曰と殊小當時ハ南小  
 の。西南の三郡と相浦郡の  
 五島平戸。夫小遠く海上を。  
 北小隔ててを岐對馬。二  
 島を加へ支配する。長崎縣  
 廳をたてて置る。中尾の

日本國志卷八





鷗一小岬。横不出る。ハ脇津  
崎。上尾。東南の方。肥後  
天草。小お向ひ。こづ。小迫  
門をお隔て。突出。たろ  
半島。とて。連なる。地峡。を  
狭く。る。島の中央。火山あり。

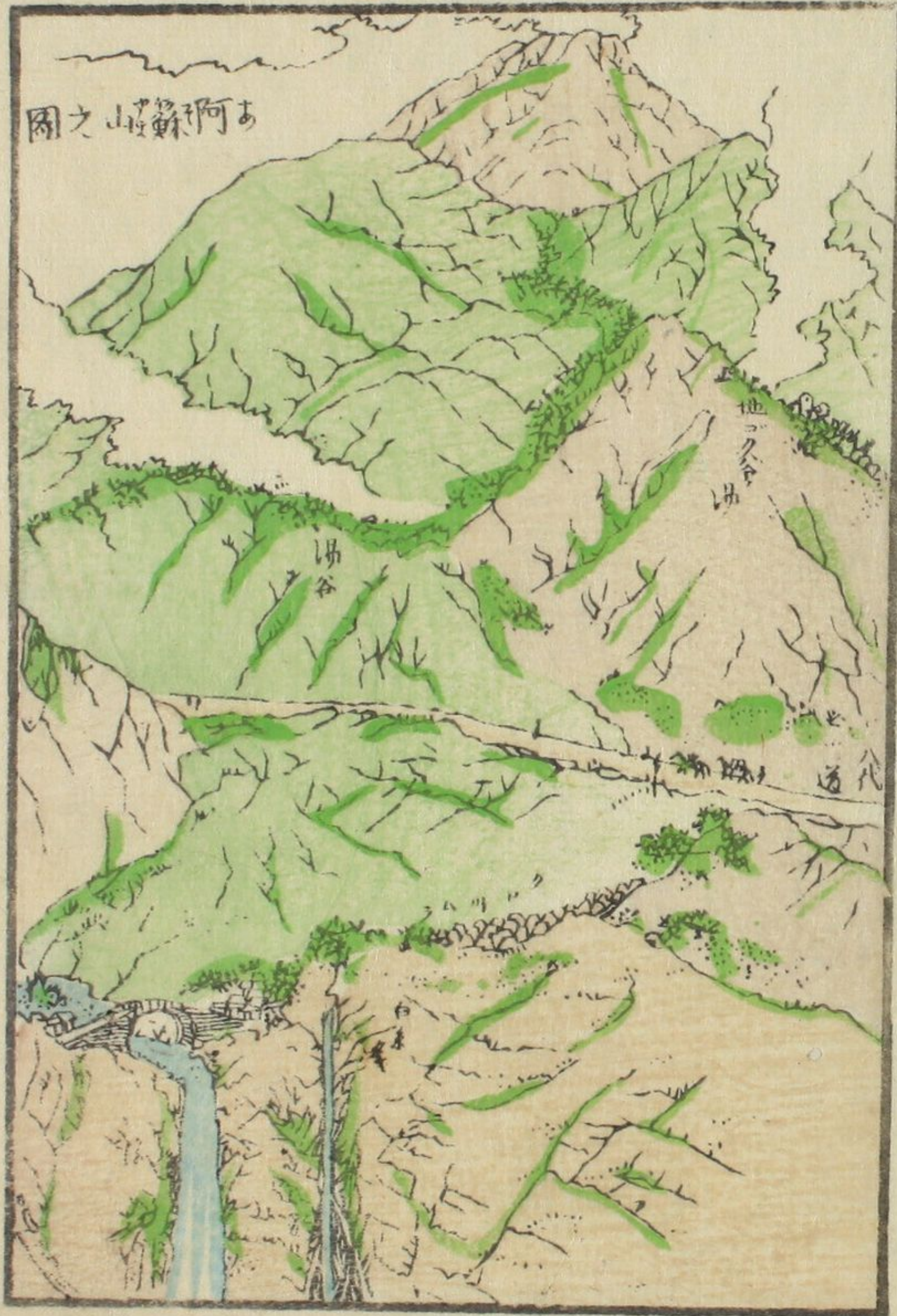
之を温泉。岳。と。火山。烟日  
夜。小噴出。持。た。傍。り。温  
泉。あり。其。附近。の。地。多  
く。大。小。あ。ま。り。小。布。き。て。并。へ  
敷。へ。攀。ら。る。小。川。と。浦。あり。  
人口。七。十。一。萬。餘。風。土。暖。氣。



産物を平戸五島の鯨、  
 唐津、その石炭坑、是  
 等、諸島を名を得、  
 其他、烟草、小伴、萬里、陶  
 器、雲丹、や、鯧、小鯨、  
 等、六番、を、肥後、の、國、地、を

筑後小地を接、  
 東の隅を正角を、  
 豊後小八、東、日向の、  
 を受け、夫より南へ押、  
 遂に薩摩小界を、西、  
 一面、濱、横、を、國、中、山、岳、數





多く。九州中のそのまき土地。  
 北より常陸東北より火燧は  
 絶えぬ阿蘇山ありと本山川  
 ち北よりより西より流るる  
 海へのり北岸の然  
 本より全国十五の郡をそ





管轄一玉ふ白川の縣廳  
 をとるくやふなる。此ふこと  
 の小川あり。南ふ川尻の河  
 水あり。此は上流を緑川  
 又川とて字おの市街字  
 おの長濱引続き。長き岬

大岡山麓



を延岬を尖を三角瀬戸  
 とふ岬の南に小湾湾の  
 南の河口を西南日向より  
 来る球磨乃下流に八代  
 川此に北岸に八代市街  
 東小種山白山乃山の東に

五家壯平家の遺民は土  
 地小匿をて別の天地を  
 たり今小世間へ通をぬはし  
 南の端に國見山は薩摩  
 の國と此界を有るに三角瀬  
 戸に西南乃海小三角の



鳥多るび多る北小島附  
 所して先なる島を天草  
 と北も肥前乃半島と  
 南薩摩の長嶋も近く向  
 して間の瀬戸瀬戸より内  
 ち内海よりこの海秋ごと

某の夜ふ光を著し轉  
 と波を焚くうと疑ひる  
 肥の不知火と是をうし  
 風も暖氣の國より人口  
 六十七の島國産陶器  
 馬磁石烟草密柑本紙



後又米穀いね小名なを得えり。  
 弟七日向むかふ太古神武天皇  
 在ありて天下てんかを平定へいぢやうし  
 玉たまの奴ぬ以前いぜんの都みやこ能よく出でり  
 して九こゝろあり一ひと能よく大國たいこくを築たり  
 北きたも豊ゆたか後ごも西北せいぼくの弓ゆみを肥い

後地ごちも張ちやう出でり西せいも尖とがり  
 薩摩さつまも小角せうかくも西南せいなんもさへ  
 大隅たゝやまも南みなみの矢やの舌しつの形かたちを  
 海うみを控ひかえり東あづまも海  
 一帯いつたい長ながき濱なみ續つづき沖おきを  
 日向ひなた乃な洋やうといふ國くに中西ちゆうせい



山深く。人跡列々ぬふあり。  
 東北の隅ふ矢岳あり。西に  
 乃方行勝山。千穂祖母  
 岳箱の山。行勝山。雲屋の  
 諸山あり。五瀬川も。西に肥  
 後。東境より。豊後。諸山

の間を。若き。二股。あり。海ふ。入る。持。川。只。一。小。湾。股。乃。間。の。延。岡。も。持。小。祝。子。川。北。川。あり。南。小。門。川。塩。尻。川。み。ま。湾。中。一。流。是。を。南。耳。川。高。城。川。持。の。



上流を神門と。西より来る  
米良川北なる城川乃南の  
方。高鍋市街の南なり。二  
瀬川阿波佐土原の市  
街をさきなる川南北の  
真西より法華岳南より

石崎川もあり西の尖りし  
谷より。散りて南大隅へ  
流るる。八幡の河内川東へ  
流るる。猿瀬川南大隅  
より来る。平山川乃水猿  
瀬川も流るる。合て石崎川



乃南より東へ流き海へ  
入る之を大渡川と云ふ猿  
瀬と平山の中間小霧嶋  
山乃峯より山頂帯り  
火烟をて天を色佳く  
やると大隅界小推葉山猪

鼻越や佐吉山大渡以南  
乃川より大渡また唐渡を  
能他二三の川あるを  
出る國東南乃隅小由是  
る出肥岬是より海岸  
南向大隅界小程近



廣渡川の上流小関きく  
市街を飯肥といひ石崎  
川乃河南宮崎郡の宮  
崎を神武天皇皇居に  
比大渡川の北岸の上別府  
村を全國の五郡を管轄

あり玉ふ宮崎縣廳を  
小あり人口二十三名あり  
北に産物を竹漆杉木  
諸材五倍子黄茶  
第八番を大隅を東を  
日向西薩摩二つのあり



狭<sup>しやう</sup>き<sup>の</sup>て<sup>は</sup>北<sup>きた</sup>より南<sup>みなみ</sup>へ細<sup>ほそ</sup>長<sup>なが</sup>く。  
南<sup>みなみ</sup>乃<sup>の</sup>端<sup>は</sup>を<sup>を</sup>二<sup>ふた</sup>股<sup>また</sup>り<sup>に</sup>分<sup>わ</sup>身<sup>み</sup>して  
二<sup>ふた</sup>つ<sup>の</sup>岬<sup>さき</sup>出<sup>い</sup>づ<sup>の</sup>形<sup>かたち</sup>ち<sup>は</sup>蛸<sup>たけ</sup>踰<sup>こ</sup>ふ  
く<sup>は</sup>似<sup>に</sup>く<sup>ら</sup>し<sup>き</sup>只<sup>ただ</sup>正<sup>ただ</sup>西<sup>さい</sup>の方<sup>ほう</sup>土<sup>つち</sup>  
缺<sup>くわ</sup>ち<sup>て</sup>薩<sup>さつ</sup>摩<sup>ま</sup>と對<sup>たい</sup>し<sup>て</sup>灣<sup>えん</sup>  
と<sup>な</sup>る<sup>る</sup>。北<sup>きた</sup>に<sup>は</sup>灣<sup>えん</sup>中<sup>ちゆう</sup>り<sup>大</sup>大<sup>たい</sup>

島<sup>しま</sup>あり<sup>て</sup>之<sup>の</sup>を<sup>を</sup>櫻<sup>おう</sup>崎<sup>さき</sup>と<sup>い</sup>ふ。  
島<sup>しま</sup>小<sup>せう</sup>湊<sup>みなと</sup>岳<sup>たけ</sup>の<sup>の</sup>根<sup>ね</sup>あり<sup>て</sup>地<sup>ち</sup>  
方<sup>かた</sup>の<sup>の</sup>山<sup>やま</sup>を<sup>を</sup>西<sup>さい</sup>八<sup>はち</sup>幡<sup>ばん</sup>日<sup>ひ</sup>當<sup>たう</sup>山<sup>ざん</sup>  
乃<sup>の</sup>諸<sup>しよ</sup>山<sup>さん</sup>あり<sup>て</sup>山<sup>やま</sup>の<sup>の</sup>北<sup>きた</sup>を<sup>を</sup>通<sup>とほ</sup>  
り<sup>に</sup>過<sup>あ</sup>ぎ<sup>に</sup>灣<sup>えん</sup>ふ<sup>る</sup>處<sup>ところ</sup>乃<sup>の</sup>廣<sup>ひろ</sup>  
瀬<sup>せ</sup>川<sup>がわ</sup>河<sup>が</sup>内<sup>うち</sup>川<sup>がわ</sup>を<sup>を</sup>日<sup>ひ</sup>向<sup>むか</sup>より<sup>より</sup>季<sup>き</sup>。



此地以北端を考まきくも  
薩摩の必へ流まはるる右  
乃角は北の頭乃佐多  
の岬小舟着る左の方  
能角頭を火崎といふ岬  
なり北の南の方海より

二つの大嶋并びまの東よ  
あまの種子嶋北は西ある  
を屋久能島屋久の西  
南小嶋あり永良部嶋  
とま之を云ふ國中八郡  
管轄を隣は薩摩乃



鹿見嶋縣。其地大抵の人  
口より十一萬四千余。産物  
屋久杉、檜林。

第九薩摩の西を海。北を  
肥後小地を隣。東北は日  
向。稍觸て東を北の半

分を大隅乃地。小坂有合せ。  
南は中々大隅と灣を隔  
て。お望む南方地勢。稍  
廣く三面海を繞らして  
由陸出ハも方は。此  
國南北長くして。坂あり



蝦のこゝろあり。頭を北小  
尾を南國中山河川  
少く。北小紫尾山北の南。  
大隅乃國を歴て東海。  
河内川の水流を過りて  
過ぎて海へ入る。北の河口

ち久見岬。北岬より南平  
乃海濱出て又窪み窪  
し。多を湊く。湊の東  
北薩摩山郡山北の東  
湊の南を地の勢次方小  
西小押廻し。半島ありて



西北むかひ小向むかひして出たるを鼻はなの  
野間の乃岬のや野間が岳だけ南みなみ小  
三さんの湾わんを過すぎ南の先さきを  
坊ぼうが崎さき是より地形ちけい一轉いつてん  
海湾かいわんありて南向みなみむかひ湾の東ひがし  
岸がし海門かいもん嶽だけ遠とほく望のぞめが

駿河まろなる富士ふじの首くび根ねり  
似にたるより薩摩さつま富士ふじとも  
申まをすねり山の南みなみを海門かいもん  
寄よ是より地形ちけい又轉またてん  
東南とうなん向むかひつて大隅たいよと互たがひり  
唐ひらより迫門せきもんをたより八やちのむ



内の大湾乃来る岬の西岸  
を橋をせとお對し。またつち  
鹿見崎縣廳を設けり。又  
南五十郡。大隅一國八  
郡を管轄し。又あまり  
久見岬の西に方三つの岬

を甕島西北隅の長崎。又地  
方小近く寄傍あり。肥後  
天草小程近し。海門岳は  
南の方。海より竹島硫黄島  
北に外小島五つあり。北に  
より遙の南平小西平島あり



順列いんれつふ并あびつてた立つたつた七島しちとう  
 としてさき出いたしるる島しまをを琉球りゅうきゅう乃なり  
 北きた新しん大だい崎さきととお并あふふ一國中いつくにちゆう  
 の人ひと口くちをを二十にじゅう三さん萬まん八はち千せん餘よ  
 産さん物ぶつ泡盛あはもり牧馬まきま烟草たばこ紅こう  
 花くわ小幡せうふん陶器とうき上布じやうふ芭蕉布せうふ

硫黄樟腦

二嶋

九くの西にし北きたふあるる大海中だいかいちゆう  
 の島國しまくにをを共ともふ長崎縣ながさきけん  
 廳てい乃なり管轄中くわんかつかちゆうふ屬ぞくををあり。  
 其その外そとをを改かめめととふ肥い



前の北に海中に十餘里  
隔てゝ島の周圍三十五  
里あり山ありして水細  
く岬四方より穴あり東に  
向ふ海湾の浪は中より  
岸へえりる山を魚釣の山

とふ北に向つる海湾の中  
ありてなるも勝本より西に  
寺院あり人曰くあり五千  
余産物綾布雲丹鯨  
對馬より去る波と朝鮮の中  
間より去る孤島共ふ距ること



四十里地形南北不長く  
しき四面岬乃敷多く蜈蚣  
乃歩む形なるま山多し  
田少く北不河嶽のま山あ  
ま北は東南乃海濱の日  
暮山より鏡山二山の後より

大星山南の山より北越えて  
くまふたなるの海あり西の  
方より河まて八里の浅  
の竹敷の浦より一里の浅  
茅の浦是より一條の路  
ありて潮よりくまふたなる



一船より往来自在なるを  
 一里して國を三分して  
 南を上上の嶋といひ北を下  
 乃嶋といふ上を周廻五十里  
 余下より一百二十五里路よ  
 り出り南の方面濱を沿ひて

教原。當國中の一都會を  
 の西南小矢立山間小崎つ  
 有明山是まはるの南端。  
 山小登りて乾の方望めを  
 朝鮮見ゆるより人口一萬  
 三千余風土寒く雪多し。



於の産物も人をもやそ  
丹推葺ふ青砥石あり

琉球を

九州薩摩の鹿見嶋より  
百十餘里を隔たると於  
乃七島以南より西南へ

うけ連綿と其臺灣嶋の  
東より四十余乃嶋布き  
列ね位を分て三つと  
中南北に三部とす  
中部の内は沖繩を即ち  
琉球も本嶋より地の段



よるに坤へけり長く乾  
より巽の方の中狭く琉  
球諸島より中央より島を  
分て中山と山南山北の三  
省とよき海濱岬群出  
西より一大半嶋あり王位北

湾を運天港港乃東岸  
岬あり其北より大湾と  
あり西南の隅を那覇  
港南の自界を表屋武嶋  
北の端を邊戸岬や川小  
くして山由牛く其大なる



山南小頭岳あり中山小  
 龜山辨嶽浦添山山小者  
 小之恩納嶽自楚名其獲  
 河小富藏川地氣溫熱  
 小風強くももや家石  
 王家卑く王居古中山

首里小河より由り中山王と  
 小風何ぞも順良くも  
 男女とも髪を結ひ之  
 簪をかきし衣服飲  
 食文字言語我と大抵矣  
 南都諸嶋の中部



遠く西南小隔し  
東西ふけ列りたり  
其大なる宮古嶋石垣  
島より表其玉湾  
三十里北部より麻  
支配りて北部大なる

大嶋を次ぐ徳島加計留  
麻より三部合せて面積  
を四百二十六方里北部を  
除き申南に於て人の  
十のつゝあり五千九百三十人  
産物砂糖朱硫黄土布



木綿小綿、紬、漆器、泡盛、芭蕉布也。墨乃表塩の縁、其  
は國の上古也。永く天  
孫氏の世を承りしを文治  
二年、乃年とす。也。權臣如  
為小滅さし、當時鎮西八

郎の源為朝一子あり。義  
兵を擧げ、位小即き、之を  
舜天王といふ。其後、治  
礼一あり。王姓志も、  
改め、つと、數世を越え、小  
人、壽舜天王、乃後裔あり。

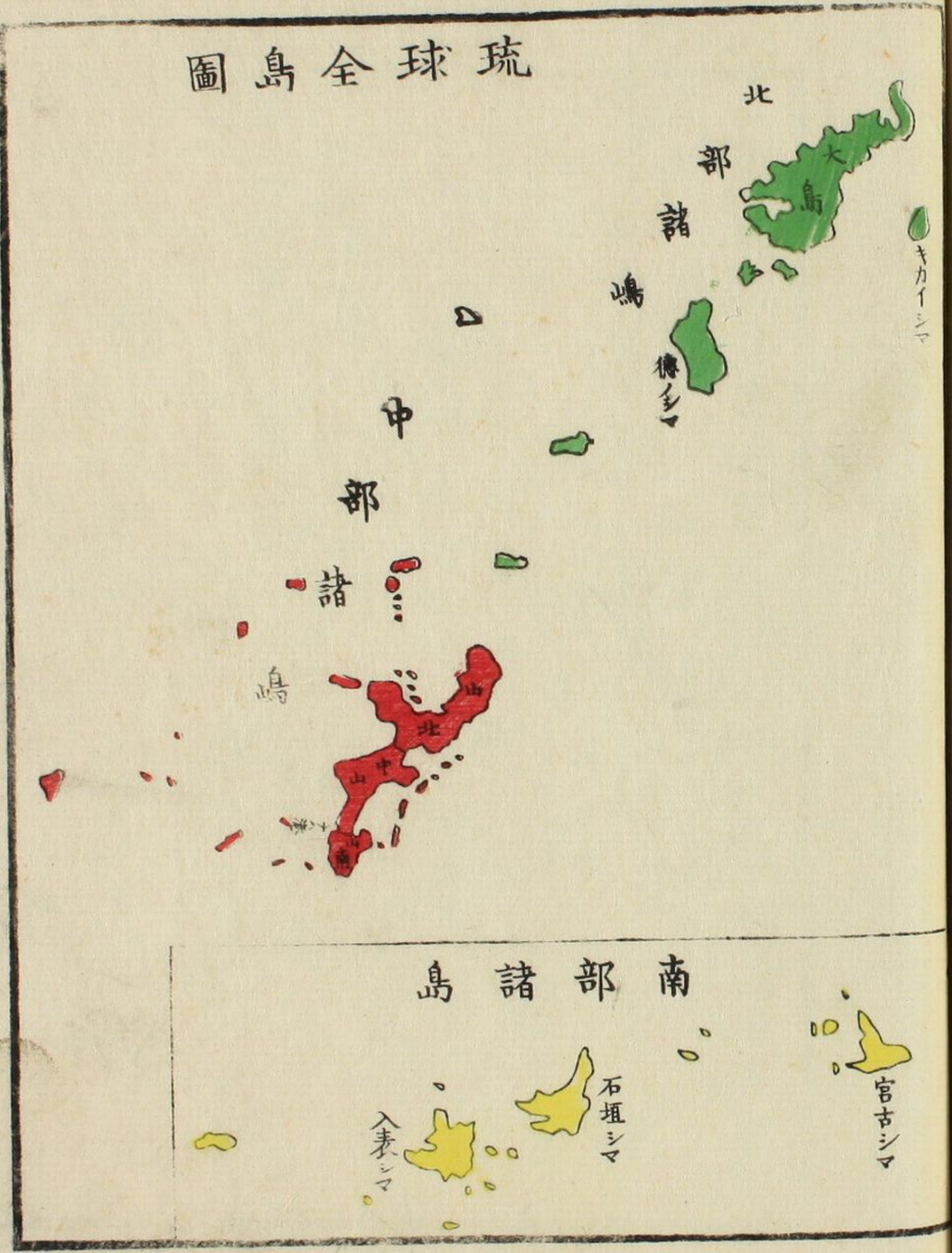
日本書紀卷之五十六  
四十六



尚圓しやうげんをたてたて王わうとななまま夫おとこ  
血統ちゆうたう連綿れんめん一いっ尚しやう代だい尚しやう  
秦しん亦また至いたるる中ちゆうのの中ちゆうににままるるままるる  
三十さんじゅう又また八はち代だい近ちん頃こん  
朝廷てうてい恩詔いんせうを降くだりりて藩はん  
王わう亦また冊封さつほうしし之これを華族くわしやく乃すなはち

列りゅう小せう入にゅう事じ使し真まを遣やりりて  
聖世せいせい乃すなはち至いた仁にん乃すなはち澤たくを邊壤へんじやう  
の民たみ乃すなはち及およ乎か玉たまひひ下くだり  
四海しがい波なみ風かぜ穩あづままりり  
枝えだも鳴なるるぬ君きみの代よの世よ末すえ  
行いくくささふふ能あたるるささるるささるる





瓜生氏日本國畫盡大尾

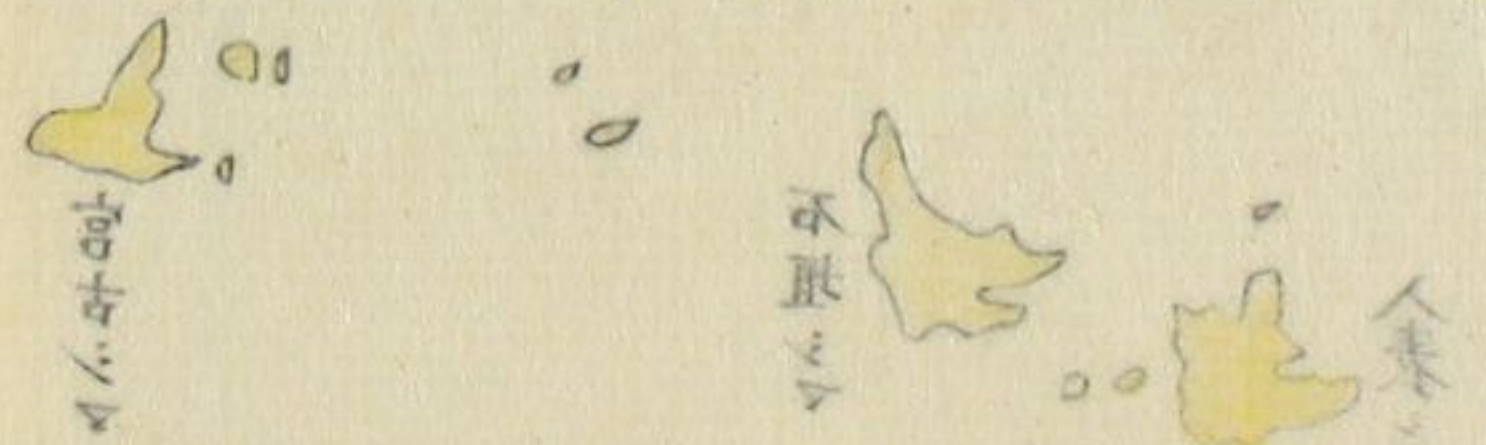
濱乃真砂乃虫つぎ一つぎ有ありく。  
 幾いく多たああ世よもも萬よろ立たししとと秘ひ心こころ。  
 之この母ははこころろふふ方はた事ことをを収とめめぬ。



圖高全莊



島嶼南



名山閣新發售畧書目 東京 芝大神宮前 和泉屋吉兵衛

小學校讀本

初篇 定價七十五錢

瓜生氏日本國盡

四ノ卷 同 二十五錢

菱潭書

五ノ卷 同 十目

菱潭書

六ノ卷 同 二十五錢

習字日本國盡 郡名人

定價 十二錢五厘 全一冊

一千八百七十三年改正 增訂萬國航海全圖

折本 定價 金壹圓二十五錢

掛物 同 金壹圓三十七錢五厘 一本

此書ハ英人イヨンベルチー氏諸名家ノ正說實驗ヲ  
輯メテ以テ鑲行ス然レテ近世地球ノ圖續テ上梓

新刻畧書目



シ各々精密ヲ競フト雖ドモ海礁砂洲粟粒ノ島嶼  
 ニ至リテハ未タ如此キ詳ナル者ヲ見ス且航海者  
 ノ年月時日ヲ記シ且ウヘ山脈大山ノ高低大河ノ  
 長短各國人民ノ種類各國ノ幅員人民ノ多寡有名  
 都府并ニ港ノ寫真圖ヲ摸シ海程ノ里數ニ及ヒ萬  
 國ノ旗章ニ至ル迄輯メテ大成全備セリ實ニ方今  
 必要ノ一奇圖ト謂ツ可シ

青木輔清譯

萬國地理小學

チアンプル氏原撰

定價 三十錢

全三冊

此書ハ地球圓體の說よりして海陸の名義土地の

廣狹人民の多少各國の風俗都府の形勢物産の多  
 寡等又至るまで漏れてあへず輯め且平仮名にて呼  
 々々繪圖を加へたる書あれハ童蒙婦女子と雖も  
 世界萬國の概略を了解し易き善本あり

輿地小學

深開内基纂輯

前編

並細亞 亞弗利加 大洋洲 南大洲

三冊

後編

歐羅巴 南北亞墨利加

四冊

全七冊

此書ハ卷首ニ地球ノ形狀及ヒ自轉ノ說ヲ解キ次  
 ニ經度緯度時刻ノ差ヒ五帶ノ區別地道四季ノ變  
 更ヲ示シ而シテ世界ノ大別海陸ノ名義ニ及ヒ世  
 界大山ノ高低大河ノ長短各國人種ノ區別言語文

新刻叢書目

二



字ノ數種教法ノ數派開化ノ等級各國ノ幅員人口ノ多寡各國ノ政體土地ノ形勢名所舊跡都府ノ景況物産増殖歴史ノ大意等ニ至ルマテ遺漏ナク輯メテ以テ大成全備セリ故ニ居ナカラシテ全世界ヲ觀ル事掌ヲ照スガ如キ一大珍書ト謂ベシ

仮名古事記 定價 金一圓十二錢五厘 全三冊

校刻日本外史 定價金貳圓三十七錢五厘 全十二冊 薄葉摺 同 金

訓蒙日本外史 大槻東陽著 一編五冊ツ、定價五圓

此書ハ日本外史ヲ和譯シ專ラ原文ヲ讀ム助ケト為セリ其意會シカタキ語ニハ左傍ニ譯言ヲ施シ尚盡ササル者ハ註釋ヲ狹ニ一ツモ疑義ナカラシム實ニ原文ヲ讀ム南針ト謂可シ

訓蒙皇國史畧 沖正修著 神代ヨリ當今 明治マデ 全十五冊

支那國史畧 沖正修著 繪入 定價 金一歩三朱 全三冊

此書ハ太古伏羲神農氏ヨリ當今同治帝ニ至ルマテ數千年間ノ歴史ノ概略ニメ且近年阿片ノ争亂



ヨリ長鬣賊呀々暴行ノ始ホラ記セリ

# 米政撮要

定價 金五十五目

全五冊

此書ハ一一ノ政治書ニ原ツキ之ヲ本國ノ法律家ニ質問スル處ト屢三廳諸局諸寮ニ至リ親シク官負ニ接シ聞見スル處トテ彼是照準シ隨テ録シ隨

テ輯ムル者ニテ徒ニ原書ヲ翻譯スルニ非スシテ專ラ其要旨ヲ撮リ之ヲ我言語ニ譯シクル書ニテ方今一大ノ宝書ト謂可シ

瓜生三寅譯  
合衆國政治小學 初篇三冊 定價四十目 全八冊

瓜生三寅撰  
貨幣 中外比較考改正 定價十目 全一冊

伊東祐愛譯  
西洋免許法 全八冊



幾何學捷徑

定價金壹分一朱

全一冊

真山虎章譯  
醫語類聚

並紙一圓五十錢

上紙一圓六十二錢五厘

全一冊

此書ハ合衆國ドングリソンの氏醫用字書ニ基キ日用欠可カラサル羅甸希臘等ノ語ヲ撰ニ尚自餘ノ書中ヨリ若干ノ雅干ヲ集メシ者ニシテ卷末ニ筋骨動脈化學元素ニ及ビ度量衡等ノ表ヲ詳ニ揭示スルヲ以テ寔ニ醫津ノ宝筏杏林ノ蘭桂ト謂可シ

瓜生先生撰  
手習草紙

初 十日  
二 十日  
三 十二錢五厘  
附録 金一朱

瓜生三寅譯  
啟蒙知惠之環

定價三十錢

全三冊

菱潭書  
皇國官名誌

定價十日

全一冊

小學校讀本  
神名垣魯文和解  
子寶習字章

初篇 世界國名入 定價三十錢 全一冊  
二篇 日本國名入 全二冊  
三篇 日本史畧 全二冊

此書ハ目今小學校ニ於テ初學階梯ノ第一課ニ備用セラル單語篇ノ俗解ニシテ天地萬物ノ名稱入



倫支體總て理義徑蹊訓蒙を專務と一世の裨童の  
為に簡易通曉あつて一めんを欲し例の五七五の長  
歌体は章句を綴らし且に習字模本の書体は倣ひ  
多し幼童樞要の書あり

沖正修著

### 慈父の教

定價廿五錢

全二冊

此書は五常五倫の道よりして日々の行ひに至る  
まで和らけ且本父は一々例を擧げて之を示し以  
て青年の児童を善道へ導くの善本なり

### 深間内基譯 啟蒙脩身録

定價二十五目

全二冊

此書は亞國のサアゼント氏ノ著せる。教訓書第三  
リードルを抄譯せしものにて其中我は無益のもの  
の省き勉めて有益のものを撰擇し童蒙婦女子に  
至るまで解し易かりんを欲し多く俗語を用ひた  
まは漢語あふも左傍に訓譯したり書きて慈父た  
らん人に必し其子弟は一讀せしむへき善書あり

美澤書

### 童蒙脩身帖

定價二十目

全二冊



此書ハ童蒙初學の人をして身を脩むの事を教へ  
られたる家書にて且習字讀本共ニ用ひらる様上  
梓られたる小學の門に入る小兒必キ講習せしむ  
可キ書あり

頭書布  
告字辨

小川監著  
日用文附諸証文

美潭書

全二冊

此書ハ從來の用文章を一變し繁飾を省き勉めて  
簡便を主とし所々漢語を用ゆると雖左傍ニ訓譯  
を施し且へ頭書又布告字辨と題し御布告中の漢  
語を輯めイロハ分より一々訓譯を附し卷末ニ當

今改正したる諸証文を加へ且證書の規則心得方  
及ひ印紙貼用心得方等に至るまで漏さなく輯  
たる書又て人たる者須臾も座右小欠く可からざ  
る珍書あり

佐藤椿園述  
農政本論

定價  
金一圓廿五錢

全八冊

佐藤椿園筆記  
培養秘録

同  
四十目  
同遺補同  
十二錢五厘

全四冊

佐藤信景著  
土性辨

同  
五十錢

全三冊

新刻畧書目

七



佐藤椿園元海述

# 草木六部耕種法

前篇八冊 定價 金一圓七十五錢  
後篇七冊 全十五冊

此書ハ凡ヘテ草木ノ培養方ニ由テ根幹皮葉花實ノ六部各々其要スル所ヲ充分ニ取得シカ為メニ其土性ニ因テ糞培ヲ異ニシ瘠土ヲ轉シテ沃地ト為シ或ハ寒ヲ禦テ温ヲ回ラシ其收穫ノ利益ヲ夥多ナラシム奇方妙術ヲ佐藤氏五世相傳實地ノ經驗ヲ以テ研究セラレシ確説ヲ懇ニ記載シタル者ナレハ方今開明ノ際農業ニ従事スル輩ハ勿論苟クモ經世有用ノ道ニ志ス人ハ必ス熟讀セスンバ

有ハカラサル一大珍書ナリ

## 蠶桑圖解

定價 十目

全一冊

## 製茶圖解

同 金貳朱

全一冊



瓜生三寅著

第三大區三ノ小區  
四番甲一番地

明治五年壬申十月新雕

東京芝大神宮前

名山閣

和泉屋吉兵衛